

## 新約単篇 フィリピ書の福音

### 持ち帰った宝

フィリピ 4 : 18

旅先から貴重なものを持って帰った感謝……というようなテキストを探しましたが、見付かりません。パウロの場合は自分で持ち帰ったのじゃなく、先方からエパフロディトに託して、フィリピの信徒たちからの愛の贈り物が届いて、パウロはそれを喜んでいる訳で、少し事情が違います。新共同訳の見出しに「贈り物への感謝」とある通りです。聖書外の例では“Golden Fleece”——金色の羊の毛皮を、ドナウの果てるあたりから持ち帰った英雄ヤソンの伝説がギリシャにあります。もっともヤソンは、自分の知恵と実力に物を言わせて宝を持ち帰りましたから、神を畏れぬ高ぶりの結末は、やがてメディアの悲劇に終わります。畏れと感謝の無い土産物は人を破滅させるだけなのでしょう。

私とヤソンの共通点は「アルゴ」'Αργώ に乗ったことで、その意味では私も“Argonaut”であります。もっとも私のは船の名ではなくて、チューリッヒまでの切符を見付けてくれた旅行代理店の名が「アルゴ」でした。いろんな旅行エージェントの名前を見ましたけれど、金色の羊毛をコルヒスから持ち帰る船の名前と言うのはさすがギリシャの会社だけあって、気が利いていると思いました。さてその金の羊毛にあたる貴重な土産ですが……。

#### 《形あるものとしては》

家内がキェティ・シオーティ夫人から戴いた指輪が、いちばん光っています。もともと宝石や貴金属で身を飾ることの少なかった妻にとっては、黒い小さな石を嵌めた可愛い指輪は、慣れないながら本当に嬉しそうです。軽蔑しないで同情を持って見てやって下さいね。私にはよく分かるんですけど、

品物の価値以上にそれを下さった方の心を感じるから嬉しいのです。ほかに、十日間泊まった宿のマダム、クレオパトラさんのプレゼントは銀の腕輪。イルカの頭が二つ付いたものです。Dクラスの安ホテルとは言え、クレオパトラお婆さんは「地球の歩き方」にも出ていまして、あれ見てやって来る若者たちもいるんです。石坂浩二さんの番組の威力……！でもマダム・クレオパトラは、私にとっては単に2年近く部屋代を取ってレシートをくれた人……という家主と店子の関係ではなくて、それ以上なんです。亡くなった御主人のユールと一緒に毎月、たいてい一度は食卓に招いてくれて、僕のギリシャ語の修行を声援してくれた人です。今度も部屋代は私たちのも、杉山さんのも滅茶滅茶負けてくれた上に、いるかの巻き付くヴラヒョーリ（腕輪）を鈴恵にくれました。それが銀の輪だから貴重なのじゃなく、イルカがいるからではなく、その人の暖かさがいるかと一緒に巻き付いているのです。「和夫は元気か？」《Τίκάνει ὁ Καζουό》と自分の孫みたいに聞いてくれる人です。

持って帰った品物の中で、いちばんかさばるものはシオーティス一家から戴いて来た古代ギリシャの壺のミニチュアです。ミニチュアとは言っても、直径17センチ、高さ27センチありますから、これを絶対割れないようにして持って来るのが大変でした。オリジナルは土器に黒い塗料を塗って、その上に赤絵式の図柄を描いたものですが、模型の方は上等の磁器製で、黒地に金色で絵がのっています。箱に入れて、隙間にタオルやらシャツやらパッチやら、ありとあらゆるものを詰め込みまして、バゲージではなく機内持ち込みにして、棚に載せる時も随分神経を使って扱いました。今は集会室のピアノの上に置いてあります。耳のような取っ手が二つ付いて、蓋が乗っているアムフォレフスという形の壺です。英語では確かラテン式に **amphora** っていうものです。本当は私の椅子のすぐ右後ろの先生の写真の下のキャビネットに載せたいのですが、祐二がすぐ落として割るような恐怖がありまして、やはりピアノの上にはしています。これもそれを下さった方たちのシンボルなんです。帰国した日にすぐスイスの絵葉書で報告申し上げた言葉は

こうでした。「三人とも無事に大阪に着きました——家内と私と壺と。」“壺”  
アムフォレフス ἀμφορεύς は男性、βασιλεύς と同じパターンの名詞です。  
《 ἐπεστρέψαμεν 》——「我々は帰った」は内加音のテストに良い問題でし  
た。

### 《次に語学の勉強の資料としては》

友人たちに貰ってきた数冊の書物があります。ルカス・フィリスさんに戴  
いた著書「新約聖書の言語」は、この方の神学部での講義をまとめた新しい  
本です。27年前に私は、そういう講座がきっとアテネ大学にあるだろうと期  
待して行ったのですが、当時はありませんでした。今はシオーティスさ  
んの弟子で、ドイツとスペインで勉強されたフィリスさんが、言語の本質と  
歴史から説き起こして、パウロの語彙とか、ヘブライ書の文体とか、イエス  
は何語でお教えになったかとか、全部扱っています。

今度行って、自分の目と耳で確かめたかったことはしかし、今のギリシャ  
語がこの21年間にどれくらい変化しているか、それにパパンドレウさんの国  
語政策の結果、スペルやアクセントの表示がどうなっているかを知りたかつ  
たんです。特に氣息記号とアクセント記号を一種類に減らした μονοτονικὸ  
σύστημα ——単一アクセント表記法という新しい略書法を正確に学びたか  
った。例えば《 ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν. 》と  
いう感じです。もちろん、現代語に限ってですが。こんなの皆さんにお見せ  
すると、「今まで減点された分の点数を返せ」と言われそうですね。

でも、こういう資料を11日間で調べるとするのは、時間的に無理だったと  
思います。ところが、昔クラスメートだった高校の国語の先生夫婦が一晩食  
事に招待してくれまして、関係のある教科書を何冊かプレゼントしてくれま  
した。現場で教えている人たちですから、だれより詳しく知っています。お  
陰で、ひと月いても調べられない位の内容を一晩で教えて頂いた。その上、

中学と高校で古典の文法や教材をどう教えるか、これも教科書に《 Στόν ἀγαπητό μας φίλο, 》「愛する友アキラオダへ」と献呈の言葉まで書いてくれた。「φιλία と ἀγάπη をこめて」の後へ署名してあるこの人の名前がまた“友”という名前 Φίλος と言うんです。

現場の先生もそうでしたが、理論の方では、学士院で辞典の編纂をしている言語学者が、「今のギリシャの国語問題で何が本当に大事なのか」を扱った短い論文をくれました。日本と同じで、ギリシャ語がどんどん崩れて節度を失って行く中で、教師と学校と学者は何を守って、どんな方向づけをすべきかです。発音も語彙もシンタクスも、不注意な若者たちとマスコミが滅茶滅茶にしている。テレビのギリシャ語、それも、司会者やアナウンサーが一番ひどい！ 古典や新約聖書以来の折り目正しい言葉をどう保存するか……。これはとても参考になりました。この方の名字はコンドソプロス、日本名「近藤三郎」です。たくさんの著書を出していますが、その中に「日本人訛りのギリシャ語と韓国人訛りのギリシャ語」というのがあります。私がちょっとイヤな顔をしたので、「君をサンプルにしたのではない。君のは大体正確だ」と言うんですが、どうでしょうかね。こうして「黄金の羊毛」とは行かぬまでも、当分の勉強の材料をこの方たちから戴いて来て、毎晩楽しみに見えています。

### 《三番目に、聖書の研究の資料としては》

杉山さんの指導教官に当たるヴールガリス教授とは、二度お会いしましたけれど、ゆっくりお話する時間がなくて、著書や参考資料を戴けなかったのは心残りでした。これはまあ杉山氏自身に委ねることにします。ところで、彼に現代ギリシャ語の指導をするルカス・フィリス講師からは、いろんな物ももらって来ました。先程触れた「新約聖書の言語」もそうですが、哲学部で私とは同じ教室に通った心安さからか、それにお互い気が合ったこともありまして、最近出された著書や論文を何冊かプレゼントしてくれまして、わ

わざわざ地下鉄の駅まで私たち三人を送ってくれました。

元々、外国人へのギリシャ語の指導は、昔は言語学の助手の役目でした。私の二回目の時に現代文学の講読を指導された先生も今は言語学の主任教授になっておられます。僕の教科書の発音篇に借用させて頂いています *μανία*, *φαντασία*, *έλαστικός*, *ταξί* という教材のオリジナルを書いた著者です。ところが今は、留学生のギリシャ語特訓は、神学部の講師のフィリスさんが責任者として教えておられるのです。フィリスさんは神学部の助手から哲学部に再入学して、古典から現代文学まで修めた方で、聖書とギリシャ文学の両刀使いでいらっしゃる訳ですが、元々聖書の専門家である方が外国人のギリシャ語の指導をなさるとするのは、アテネ大学として大改革だと思います。今年の受講生はアフリカ人が多く、イギリス人、イタリア人、アラブ人もいるが、日本人は私一人……と、杉山さんは書いていました。

さてそのフィリスさんの主な著書の中に、「共観福音書の並行記事」というのが、第1巻だけ300頁あまり出ています。ちょうど小浜さんが先々週習っておられたような、資料説や様式史や編集史の方法も詳しく取り上げながら、しかも終始ギリシャ教会の伝統を守って、保守的な立場の結論を出しておられるのが参考になりました。このフィリスさんの研究論文の中に、「主の七十人の使徒たちの問題」というのがあって、ルカ10章の七十人を聖書と伝承を資料に、いろんな角度から観察しています。もちろん、広義の *שְׁלִיחִים*, *שְׁלִיחִים* の意味で「使徒」と言われる訳です。

外にも「イエスの系図に関する研究」「使徒たちの食糧と生活維持について」「福音書の復活記事冒頭にみる夜明けの表現の差異と当時の時刻表示方式」その他、短い論文も頂いてきました。私自身はしかし共観福音書問題……ベックマン兄弟の表現では「共観福音書現象」を自分なりにおさらいするための、貴重な資料を戴いて来たことを感謝しています。以上は戴いて来た壺や指輪のような記念品、語学の参考資料、新約聖書の学びへの刺激材料……

…というようなものでしたが、今度の旅から得た……

### 《最大の貴重なもの、金の羊毛に匹敵するものは》

果たして何だったろうかと考えてみました。それは僕が、シンから温められて、慰められて帰って来たということです。帰ってすぐシオーティスさんに出した葉書には、三人とも無事だった報告の後に、「充電されてギリシャから帰りました。新品のバッテリーみたいになりました」と書きました。

「知己」という言葉があります。自分を知ってくれる人、変わらずに愛していてくれる人です。それも私に値打ちがあるから認めてくれるのじゃなくて……そんなのでしたらカッコイイですけど、滑稽です。鼻持ちならない自惚れを支えるだけです。二回留学して3年必死で努力したが、ギリシャ語も流暢とは行かない。神学的にもなお素人に近い。新約聖書を読むことだけは、自分なりに40年続けて来ましたが、その聖書の研鑽ということでも厚みがまるで違う方たちを前にすると、小さく縮んで消えてしまいそうです。文学部の先輩の近藤さんの前でも、神学部の講師フィリスさんと話していても、恥ずかしいくらい自分は小さい。師匠のシオーティスさんに至っては、この人と一緒にいること自体場違いじゃなかろうか、とさえ思うことがある。その場違いで幼稚な者を一人の“努力するヘレニスト”と言うだけの理由で大事にして、誇りにして、「しっかり！」と声援を送っていて下さる……と言うより、その方たちを主が私のために備えてくださったのです。

時々思うのですが、これは私が祐二や実早恵が立って歩くのを見ているのと同じではないか。「よう“立ッチ”しよった。実早恵は賢いなあ。上手、上手！」……座敷机で伝い歩きしかけただけで喜んでます。次はクック履いて歩きよるで。祐二と追っ掛け合いでマイマイコンコもじきしよる。先々まで見て、楽しんで、誇りにしている。ちょうどそれと同じように、ギリシャ語を話す日本人ヘレニストとしても聖書の学徒としても頼りない者に期待を

かけて、見ていてくれる……そういう声援者にギリシャで会ってきたから、僕は温められて、チャージされて帰って来ることができた。

私が言いたいのは、立派な人たちに知ってもらったことだけが嬉しくて励みになるのじゃないのです。昔の学生下宿のおかみさんとか、彼女の亡くなった御亭主の弟だとか、学者でも知識人でもない普通の平凡な人たちが、「織田さん、元気でやってるか……」「あんた、ちっとも変わってない。シワはちょっと寄ったけど」と言っていて、私の仕事と勉強を喜んでくれるのが嬉しいのです。シワは32……というのは、向こうではシャレにならないですね。考えてみれば、私が合計3年あの地において主から戴いた宝は、結局そういう人たち一人一人との心のつながりです。その人たちの温かさが、“ホカホカ懐炉”の温もりみたいに大東までついて来て残っているのです。

いつもこのことを考えると思い出す言葉があります。京都大学の名誉教授松平千秋氏には一度、研究室でお目にかかっただけで、そんなに親しく存じ上げている訳ではないのですが、あるとき松平さんから戴いた葉書の中の言葉が忘れられないでいます。「若い頃は私も、広島大学の関本さんと一緒に、現代ギリシャ語の習得に夢中になったものです。関本さんは立派な文法書を残されましたけれど、私の方はその後一向に、現代語の方は上達しませんでした。思うに、その後二三のギリシャ人との不愉快な経験から現代ギリシャ語への熱意が冷めて行ったのだと思います。」そんな趣旨のお葉書でした。

その時以来、折りに触れて実感するのは、私は松平さんにくらべてギリシャ人運が良かったと言いますか……。本当に温かい心の優れたギリシャ人とばかり出会って来たことです。もっと正確に言うと、神様は何故か私を憐れんで、良いギリシャ人にだけ巡り合わせ、ギリシャ人の温かさで満たしてくださいましたのです。

一昨日の日曜日に大東で読んだマタイ福音書の言葉、イザヤからの引用を

思い出します。「彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない。」その「主の僕」のやさしい心は、伝承に縛られた古い教会とか、聖書的か非聖書的かとか、聖人やイコンにまだ性懲りもなく執着しているかとか、復帰運動知ってるかとか、すべてそんなこととは拘わりなく、主の御業として、太陽の温もりのように、あのアクロポリスの周りを覆っているのでしょう。

この拙い三部作の一と二を読んで感想を送ってくれた友人、板垣幸夫さんのコメントにこうありました。「西にも東にも地球の裏側にも、主にある器が点在しているのだなあと、嬉しい気持ちでした。」

(1989/10/17)